フローベール作品批評について
-『三つの物語』を中心に -

大橋　絵理
長崎大学大学教育機能開発センター

History of the Criticism on the Flaubert's Works
- Particularly Concerning on *Trois Contes* -

Eri OHASHI
Research and Development Center for Higher Education, Nagasaki University

Abstract

After the trial of *Madame Bovary*, whenever Flaubert's works were published, they invited sharp criticism and received deep sympathy from literature experts and readers. Especially, in the 20th century, the novelists of the nouveau roman, Michel Tournier et Michel Butor, recognized him as a pioneer in the contemporary literature, and Flaubert's novels has become one of the most primary targets of new criticism. In this article, I will examine and discuss the history of the criticism on Flaubert's works, in particular, concerning on *Trois Contes*.

Key Words：Flaubert, *Trois Contes*, criticism

１．はじめに

19 世紀は、バルザックの『人間喜劇』や、ゾラの『ルーゴン・マッカール叢書』にも顕著に現れているように、大衆的なものも含め、数多くの小説が相次いで出版された小説の世紀であった。その中で､フローベールは 1857 年の『ボヴァリー夫人』発刊から 1880 年の死に至るまで、6 冊の作品を刊行したにすぎない。

しかし彼の作品は刊行されるたびに、激しい批判や深い共感を呼び起こし､同時代に限らず､様々な批評の対象となってきた｡特にミッシェル･トゥルニエ､ミシェル･ビュトールのようなヌーヴォーロマンの作家達は、フローベールをそれまで考えられてきたロマン主義と写実主義の狭間の作家ではなく、現代文学の先駆者だと認め、フローベールの作品は批評家たちからも再評価され現在に至っている。

本論ではフローベールの最後の完成作品であり唯一の短編集であるという特徴を持つ『三つの物語』が近年どのような批評的言説を産出してきたかを中心に、フローベールの作品批評史を概観するものである [1]。

２．作品の全集・改訂版

まず、フローベールの作品がどのように読み継がれてきたかを見てみよう。全集としては、1910 年から 1954 年にかけて「コナール版」[2]、その後「ランコントル版」[3]、モーリス・バルデッシュの監修による「オネットオム版」[4] 等が出版された。ただし、いずれも不完全なものでしかなく、これらの多くは現在 Gallica 上で閲覧できる。現在一番体系的な全集は「プレイアッド版」の作品集二巻となっているが､厳密な改訂版とは言いがたい [5]。だが最近、ペーパーバックで各作品の改訂版も相次いで出版され、詳細な註とともに信頼がおけるものとなっている。また「プレイアッド版」で『初期作品集』も刊行され [6]、さらに書簡は全 5 巻が終了した [7]。

『三つの物語』に関しては、『まごころ』は 1877 年に「モニトゥール」紙に 4 月 12 日から 19 日、『聖ジュリアン伝』は「ビヤン・ピュブリック」紙に 4 月 19 日から 22 日、『ヘロディアス』も同紙に 4 月 21 日から 27 日まで掲載され、1 冊本としては同年 4 月 24 日にシャルパンティエから出版された。短編で読みやすく、フランスの教科書に掲載されたりすることから、ペーパーバックの改訂版が近年でもしばしば出版され、特に『まごころ』だけの出版も多い。『ボヴァリー夫人』や『感情教育』等の新版が出版され続けていることは当然だが、一般的にフローベールの作品中、文学史的及び文学研究上、最も重視されていないといってもいい『三つの物語』が現代においてこれほど版を重ねている事実は、無視できないであろう。

３．同時代の批評

『三つの物語』の批評分析の前に、『ボヴァリー夫人』発表当初から、現代に至るまでのフローベール作品に対するおおよその批評の変遷を見てみよう。やはり彼の最初の刊行作品『ボヴァリー夫人』に対しての裁判は、フローベールという作家への同時代の見解を決定したと言えるであろう。『ボヴァリー夫人』は 1856 年から「パリ評論」で連載され始め、1857 年に裁判となり、検事エルネスト・ピナールがキリスト教道徳の名において、姦通は罪の烙印を押され弾劾されるべきであると非難した。しかし、結局裁判長は、問題は確かにあるもののこの作品は真の芸術作品であるという判決を下し、フローベールは無罪となった。この裁判で興味深いのは、フローベールの作品が写実主義文学と考えられ、写実主義文学は、憎悪、復讐、愛欲等々の諸情念を描くものだと断定された点にある [8]。

そのような状況の中でドュランティが書いた記事は、当時の『ボヴァリー夫人』に対する批判の要約とも言える。

> *Madame Bovary*, roman par Gustave Flaubert, représente l'obstination de la description. Ce roman est un de ceux qui rappellent le dessin linéaire, tant il est fait au compas, avec minutie ; calculé, travaillé, tout à angles droits, et en définitive sec et aride.[…] Le style a des allures inégales comme chez tout homme qui écrit artistiquement sans sentir : tantôt des pastiches, tantôt du lyrisme, rien de personnel. [9]

このような批評に対して、フローベールは書簡で次のような見解を述べている。« On me croit épris du réel, tandis que je l'exècre ; car c'est en haine du réalisme que j'ai entrepris ce roman »[10]. また、彼はたとえ自分に不利な判決が出たとしても断固たる態度を取ろうとしていた。

> Je t'assure que je ne suis nullement troublé, c'est trop bête ! trop bête !
>
> Et on ne me clora pas le bec, du tout ! Je travaillerai comme par le passé, c'est-à-dire avec autant de conscience et d'indépendance. Ah ! je leur en f... des romans ! et des *vrais* ! j'ai fait de belles études, mes notes sont prises ; seulement j'attendrai, pour publier, que des temps meilleurs luisent sur le Parnasse.[11]

もちろん、『ボヴァリー夫人』刊行以降も、彼が作品を発表するたびに様々な論議が重ねられた。次の『サランボー』では、フロマンタン、ルコンド・ド・リールが独創的な作品だと称賛し、ユーゴーは書簡でアカデミー・フランセーズにふさわしい小説だと述べた。しかし、『ボヴァリー夫人』の時は好意的であったサント＝ブーヴが『サランボー』に対しては、3 回にわたって「コンスティテューショネル」紙に歴史的な側面から批判を浴びせ、フローベールとの間で激しい論争になったことも忘れるわけにはいくまい [12]。上記の論争によって興味をかきたてられ、読者が増加したことで『サランボー』はある程度の売れ行きを示したものの、同時代人にはなじみのないカルタゴという古代に消滅した都市を舞台にした点、またその描写の難解さゆえに好意的な批評は多いとは言えなかった。

さらに、次の作品『感情教育』では無駄な描写が多すぎるという批判もあったが、エドマン・ド・

ゴンクールは 1869 年 11 月 24 日の書簡で次のように評価する。« la scène pour moi suprêment chef-d'œuvreuse comme dirait Gautier, est la dernière visite à Frédéric ; je ne connais dans aucun livre rien de plus délicat, de plus tender, de plus trsite, et sans ficelle aucune »[13]. このような肯定的な批評もあった『感情教育』とは異なって、『聖アントワーヌの誘惑』は、主だった批評家たちから酷評され、それに対してフローベールは非常に不満を抱き、ジョルジュ・サンドに次のような書簡を送った。

> Ça va bien, chère maître, les injures s'accumulent ! C'est un concerto, une symphonie où tous s'acharnent dans leurs instruments. J'ai été éreinté depuis le *Figaro* jusqu'à la *Revue des Deux Mondes*, en passant par la *Gazette de France*, et le *Constitutionnel*. Et ils n'ont pas fini ! Barbey d'Aurevilly m'a injurié personnellement, et le bon Saint-René Taillandier, qui me déclare « illisible », m'attribue des mots ridicules. Voilà pour ce qui est de l'imprimerie. Quant aux paroles, elles sont à l'avenant. Saint-Victor (est-ce servilité envers Michel Lévy ?) me déchire au dîner de Brébant, ainsi que cet excellent Charles-Edmond, etc., etc.[14]

ただし、フローベールも好意を持っていたテーヌは、『聖アントワーヌの誘惑』の芸術性に対して高い評価を下す[15]。彼は、連続して喚起される様々な幻想の中でのアントワーヌの幻覚、特に裸の行者とシバの女王の描写に感嘆し、神秘的かつ形而上学的な世界が構築されたテクストの構成と文の形式を賛美する。しかし、このような批評にもかかわらず、この作品はほぼ読者の注意を引くことがなかった。

結局、彼が『ボヴァリー夫人』刊行時に与えられた「レアリスム」の作家、およびフローベールと親交があったゾラが中心となった「ナチュラリスム」の作家の一員[16]という、本人にとっては非常に不本意なレッテルは、死ぬまで変化しなかったのである。

４．フローベール没後から現代まで

フローベールの没後は、1902 年に出版されたジュール・ド・ゴーティエの『ボヴァリスム』[17]に見られるように、新たな解釈でも作品が読解されるようになり、欲望と現実の狭間で精神的均衡を崩すことを意味するボヴァリスムという言葉の流行によって、フローベールは近代社会の典型的な欲望を描き出した作家だと認識された。ただ基本的には、その作品は、歴史主義的見地や作家と作品の関係を重視した実証主義的見地から分析されることがほとんどであった。

4.1　意識の批評・テーマ批評

しかし、1920 年代は、フローベール研究にとって大きな転換期となった。チボーデは 1922 年に、『フローベール論』の中で、ブリュヌティエールの無理解な批評に対し、作家の無意識と小説との関連を客観的に描き出し、フローベールの文体に注目した。そして、プルーストもフローベールの文体のリズムや間接話法の使用法、とりわけ時間の空白の描写の美しさを評価した[18]。またシャルル・デュ・ボスは、1921 年に発表した「フローベールにおける内的環境」で、次のように述べ、新たな批評の流れを作った。

> Je voudrais seulement revenir, après beaucoup d'autres, sur le <milieu intérieur> selon la précieuse expression de Claude Bernard d'où l'œuvre de Flaubert est issue, que le constant labeur de son génie a eu pour objet de dominer d'abord, puis de canaliser.[19]

さらに 1950 年代になると、作品を作家との関係ではなく作品の自律性という観点から隠れた意味構造の探求するヌーベルクリティックの批評家達が、フローベールのテクストを頻繁に取り上げるようなっていく。その結果、彼のテクストは意識批評、テーマ批評はもちろん、精神分析的、物語論的、記号論的、社会学的批評の対象として盛んに論じられるようになった。

まず、先陣をきったのはアウエルバッハであろう。彼は『ミメーシス』[20]の中で『ボヴァリー夫人』の日常の食事の場面を取り上げ、この描写は

単に状況を説明しているのではなく、エンマの絶望という内的情景を示し、それがこの小説の本質に密接に結びついている点にフローベールの近代性があると指摘した。それに続いてフッサールを受け継いだジョルジュ・プーレは、1949 年の『人間的時間の探求』[21] と 1955 年の『円環の変貌』[22] において、実証主義的批評、伝記、歴史主義的批評を否定し、意識批評という新たなアプローチの可能性を示唆し、時間、空間という観点からフローベールの作品を分析した。特に後者に収められた「フローベールの円環思考」では、『ボヴァリー夫人』を中心に円環や螺旋における中心から円周へ、円周から中心へという運動がフローベールの想像力的世界の特徴となっていると明らかにした。プーレは、テクストは読み手の持続的な意識の内部に存在し、それは作者の純粋意識との結合によって生み出されるものであると考えたのである。

物質をもとに想像的創造の運動を解明しようとしたバシュラールの思想を正当に受け継いだジャン＝ピエール・リシャールは『文学と感覚』[23] で、特徴的な感覚を基盤とし、そこから現れてくる潜在的な構造を明らかにすることでテクストの多義性を認め、テーマ批評を確立した。その中でフローベールの想像力の特徴は水のような浸透力にあると指摘し、一見無形なものの連続性の上にひとつの確固としたフォルムが形成されていると説く。また、ジャン・ルーセも、窓のモチーフを通した視覚的フォルムに注目することで、エンマの夢想の構造とも重なり合うフローベールの夢想の世界を分析し[24]、ピエール・ダンジェは、『フローベールの小説における感覚と事物』[25] で、感覚と感情がすべての風景や「もの」の描写を支配しているという特性を述べた。

他にはサルトルもフローベールに多大な関心をよせ、未完の大作『家の馬鹿息子』[26] で、フローベールの書簡やすべてのテクストから、彼の家族・友人関係を分析し、フローベールは自分を偶然的な存在としてしか見なせず、自己を偽るために俳優のように生きることを選択し、さらに自分に確信を持つために作家になろうとしたと言い切る。しかし、このような実存主義的な研究は、詩学的な批評の流れに押されていく。

4.2　詩学・物語論的批評

バルトは 1953 年に『零度のエクリチュール』[27] の中で、フローベールはブルジョワ的「職人芸的エクリチュール」を確立したと発言し、構造分析的側面からのフローベール小説の読解の新たな可能性を示唆した。さらに、『新批評的エッセー』の「フローベールと文」で、フローベールが文を無限に訂正する創作態度に注目し、「エクリチュールは一つの全体性」であるという結論を出す。

> Écrire c’est vivre (« *Un livre a toujours été pour moi*, dit Flaubert, *une manière spéciale de vivre* »), l’écriture est la fin même de l’œuvre, non sa publication. […] écrire et penser ne font qu’un, l’écriture est un être total.[28]

そして批評研究の大きな転換となったのは、記号論を使い、物語の叙述形式を模索し、ナラトロジーを体系的に確立したジェラール・ジュネットの『フィギュール I』の出版であった。彼はその中の「フローベールの沈黙」で描写を動詞の時制によって分析し、物語の中断、沈黙がフローベール作品を特徴付けていると論じた。そしてフローベールは「現代文学全体がそこから始まるあの小説の非ドラマ化、あえて言うなら非小説化」[29] を初めて実行した、と述べる。

4.3　社会学的批評

テクストは自律していると考えても、やはり作家は意識的にしろ無意識的にしろ限定された社会の中で生き、その社会を反映しているのである。それゆえ当然テクストの中にも作家の生きた社会は刻印される。ゲオルゲ・ルカーチは、『小説の理論』[30] で、『感情教育』は文学的構造と歴史的・社会的要素がほぼ完璧に結びついたテクストであり、それこそがこの小説の美しさであると論じた。このようなアプローチは近年盛んに行われ、文学の社会性と同時代のイデオロギー及び知の体系の関係を明確化しようとしたピエール・マシュレは，『文学生産の哲学』[31] の「フローベールの非写実主義」の章で『聖アントワーヌの誘惑』は、ヘーゲル、カント、スピノザという哲学的観念だけで

なく 19 世紀の科学的イデオロギーであるエネルギー論や生物学と現実との錯綜、葛藤の上に成立していると論破している。

また、「場　ハビトゥス」という概念を確立したピエール・ブルデューも 1992 年に出版した『芸術の規則』[32] の中で『感情教育』の読解に「外部」すなわち 19 世紀の社会を持ち込んでいく。そして、すべての登場人物は現実と同様にそれぞれ階層化された「場」に属しており、彼らの行動あるいは環境は社会全体を表象するものとなっていること究明した。

4.4　精神分析的批評

もちろん文学批評は精神分析とも結びついた。マルト・ロベールは精神分析をテクストだけに限定した『小説の起源・起源の小説』[33] で、「私生児」と「捨て子」という意識から様々な作品を比較し、フローベールの場合は基本的にその 2 つの意識が錯綜しており、初期作品『狂人の手記』の中には、「家族小説」の痕跡があると指摘する。またジャン・ベルマン＝ノエルは 1972 年に出版した『テクストと前テクスト』[34] において、「前テクスト」とは、テクストの執筆に役立った資料の総体であり、それらは批評的言説の内部に属し、最終稿と継続した読解対象であると論じた。このような考えから、執筆過程での削除や付加は、無意識の言説や検閲を想起させるとして、彼はそれらを精神分析的批評に有効に利用し、『精神分析と文学』[35] で作家の無意識ではない個別の「テクストの無意識」に言及する必要性を強調した。

4.5　生成批評

しかし、一方「前テクスト」の考えは、ナラトロジーと結びつきながら、新たな生成研究というジャンルを生み出した。現在では、フローベール研究は草稿なしには存在しえないと言ってもよい。実際、ルーアン大学では『ボヴァリー夫人』の草稿と生成批評版が、Gallica 上でも多くの草稿が順次公開されている。

生成批評に関しては、数多くの論文や著書が出版されているが、特に 1995 年のイヴァン・ルクレールの『ボヴァリー夫人』[36] の生成批評版と、フレデリックとアルヌー夫人の最後の会合の場面での「金銭」の関与の重要性を指摘した松澤和宏の『『感情教育』草稿の生成批評研究序論－愛、金銭、言葉－』[37] は現在の草稿研究の方向付けを行なった研究だと言えるであろう。他にもエリック・ル・カルヴェーズの『描写の生産－『感情教育』の外生的生成過程と内生的生成過程』[38]、ベルナール・ガヌバンの『フローベールと『サランボー』－テクストの生成』[39]、ジゼル・セジャンジェールの『作家の誕生とメタモルフォーズ － フローベールと『聖アントワーヌの誘惑』』[40]、菅谷 憲興の『フローベール認識者－『ブヴァールとペキュシェ』の医学資料をめぐって』[41] 等、近年生成批評は非常に活発に行なわれている。

５.『三つの物語』：同時代の批評

さて、『三つの物語』は、フローベールの他の作品に比較すると小品と見做され、いまだその研究史の薄さを指摘せざるを得ない。しかし、このコント集は発表当時はおおむね好評であり、フローベールの作品の中で最も好意的に受け入れられたと言っても過言ではない。もちろん、郷土の作家を褒め称えるものではあるにしても、ルーアンの地方紙、「ルーアン新聞」に掲載されたアルフレッド・ダルセルの書評は、当時の一般的な読者の意見でもあったと考えられる[42]。その中で、各コントはそれぞれの社会状況に呼応しており、フローベールの博識を示すものであると賞賛されている。なによりも、『聖ジュリアン伝』はルーアン大聖堂のステンドグラスの有名な伝説、『まごころ』は同時代のノルマンディー地方の女中の話、『ヘロディアス』は少々難解ではあるにしても、古代からの絵画や彫刻のモチーフで当時流行ともなっていた『聖書』の聖ヨハネのエピソードであるという点から一般的な読者を十分に魅了したと想像できる。

また、テオフル・ゴーティエとともにフローベールのよき理解者であったテオドール・ド・バンヴィルは「ナショナル」紙で、フローベールは詩人であると評価する。

> Ces contes sont trois chefs d’œuvre absolus et parfaits, créés avec la puissance d’un poëte sûr de son art, et dont il ne faut parler qu’avec la respec-

tueuse admiration due au génie. J'ai dit : un poète, et ce mot doit être pris dans son sens rigoureux, car le grand écrivain dont je parle ici a su conquérir une forme essentielle et définitive, où chaque phrase, chaque mot ont leur raison d'être nécessaire et fatale, et à laquelle il est impossible de rien changer, non plus que dans une ode d'Horace ou dans une fable de La Fontaine.[43]

常にフローベールの作品を批判してきたブリュヌチエールは、「両世界評論」に書いた「小説の中の博識」の中で『感情教育』には心理描写がないという視点から小説とは呼べないとし、フローベールの作品を基本的に退屈で価値がないと言い切っているが、それでも『三つの物語』は過去の作品よりは読めるし、特に心理描写があるという理由で『まごころ』が一番ましであると述べている[44]。

６.『三つの物語』：草稿研究以前

それでは、フローベールの死後、この作品に対する批評はどのように変化したのだろうか。批評の世界で、『三つの物語』が重視されていなかったのは、チボーデの『フローベール論』の中に『三つの物語』に関する章がないことからも明白であろう。

しかし、クロード・ディジョンはフローベールの後半の作品、つまり『聖アントワーヌの誘惑』以降を中心に分析した『フローベールの最後の顔』[45]の中で、ある程度の部分を『三つの物語』にさいている。彼の批評は基本的に、チボーデの流れをくむ作家と作品の分析だが、コントという形式は小説よりも限られた内容となるという見解を述べ、作品の完成度を評価しながらも、やはりこのコント集は『ブヴァールとペキュシェ』を再び書き始めるための習作にすぎないと考えている。

その後ジョルジュ・プーレは、『円環の変貌』中で、『聖ジュリアン伝』の２度目の狩猟で動物達が、ジュリアンを輪になって取り囲み押しつぶそうとする場面、また『まごころ』で、フェリシテの耳が聞こえなくなり「彼女の様々な観念の小さな環はますます縮んでいった」という表現から、フローベールの晩年の作品は収縮した存在、閉ざされた存在を主題にしていると指摘したが、あくまでも『ボヴァリー夫人』や『感情教育』分析の補足的な扱いであった。

しかし、徐々に主に二つの側面から『三つの物語』は批評家たちの間で注目されるようになる。ひとつはやはりナラトロジーの側面である。バルトは『物語の構造分析序説』の中で『まごころ』に言及し、「フェリシテの家における突然の鸚鵡の登場は、相関項として剥製の挿話、崇拝の神話を持っている」[46]と鸚鵡の物語論的な機能を述べている。さらに『言語のざわめき』[47]ではオーバン家の部屋にある晴雨計を『ボヴァリー夫人』のルーアンの町の描写とともに例にあげ、記号内容の欠如が写実主義の表現そのものとなっているとして、それを「現実効果」と名付けた。

さらに、ジェラール・ジュネットは『三つの物語』について言及はしなかったが、彼の理論を用いての『三つの物語』の分析が始まった。その理由のひとつには、各コントが伝説、創作、『聖書』のエピソードと異なったディスクールから成立していることが挙げられる。ドゥブレ＝ジュネットは、1970 年にバルトの「現実効果」の分析を取り上げながら、「『まごころ』における物語のフィギュール」の中で、統辞論や修辞学の問題に注目する。そして、些細に見える物の描写の中で反復、隠喩、換喩の効果を錯綜させることは、読者に次のような眩暈をもたらすと語る。

Nous voici au seuil d'une interprétation réaliste ou symboloique. Flaubert nous impose de ne jamais franchir ce seuil, il nous impose de nous en tenir à l'illusion. Au terme de cette analyse, les figures ne sont figures de rien, sinon d'elle-même.[48]

さらに、1971 年に彼女は「『三つの物語』の語りの技法」でジュネットの『物語のディスクール』を利用し、焦点化に注目し、以下のような結論を出す。

La focalisation intrene opère par un glissement

naturel du narrateur vers son objet ; c'est comme un mouvement de sympathie où l'on concentre son regard pour l'intensifier et mieux faire comprendre. Au contraire, la focalisation externe est une restriction comme asséchée de toute compréhension, l'a-pathie du témoin n'est pas naturelle à un narrateur actif.[49]

その他にも、マリー＝ジュリー・アヌルは「『三つの物語』のディスクールの表明」[50]で、このコントを「語り手」「時間・空間・視点」「物語言説と描写」「物語言説と登場人物と場所の特徴」という4つの側面から分析している。『三つの物語』では、物語の初めから読者には筋がわかっているが、物語の内部ではすべてが隠されており、「語り手」だけが物語の運命を握っている。ただし描写の後にそれに関連した人物が登場し、その人物の視点で次の描写が語られるなど、あらゆる描写に連続性が認められると指摘した。

また、「垂直」と「水平」というテーマに注目した蓮見重彦は、「フローベールの『三つの物語』における語りとテーマ研究の相関的な様相」[51]で、閉鎖的・地上的な空間から開放的・天空的な空間へ、不吉さから幸福へ、また沈黙から饒舌さへと絶えず移行することが、このコントの語りの構造となっており、このような錯綜が意味作用を無限に広げているという見解を述べた。ナラトロジーに加えて精神分析的手法を持つショシャナ・フェルマンも『三つの物語』に注目する。彼女は「レアリスト的幻想と小説的反復」[52]で、『まごころ』の「純粋さ　simple」は社会的・宗教的言説・階層を受諾し、最後に狂気＝超自然に陥ることであり、それがフローベールにとって「現実的なこと」であると考察した。さらに「フローベールのサインー『聖ジュリアン伝』」[53]では、物語の中にも「ステンドグラス」が組み込まれ、ジュリアンが殺害した両親の血を赤く染めることから、この血はフローベールのペンのインクの象徴であり、「伝説」はジュリアンの伝説であると同時に「私の」という言葉から見てとれるようにフローベール自身の伝説であると論考した。

7.『三つの物語』：草稿研究

このような物語論的分析が進んでいく一方、短編で他の作品と比較して草稿の量が少ないことから、『三つの物語』の草稿研究も急速に進んでいく。1950年にマリー＝ジャンヌ・デュリーが『フローベールと未刊行草案』[54]の一部で『聖ジュリアン伝』のカルネの鷹のメモについての分析をしたが、これは、『三つの物語』の草稿分析の始まりであった。そして、1974年にはフランソワ・フルリーが『『まごころ』のプラン、ノート、シナリオ』[55]を発表し、1976年にはジョージ・ウィレンブリンクが『フローベールの『まごころ』の草稿』[56]を出版し、プラン、カルネ、ノートの整理を行っている。しかし、本人も序文で述べているように、この書籍はすべての原稿ではなく部分的に彼が選択したものだけで構成されていて不十分なものであった。

『三つの物語』の生成批評版に最も貢献したのは、ジョヴァンニ・ボナコルソである。彼は、1983年に『まごころ』[57]、1991年と1995年に『ヘロディアス』[58]、1998年に『聖ジュリアン伝』[59]を出版する。彼は、ノート、プラン、草稿、最終コピーを網羅し、非常に困難だと言われていた判読、欄外の書き込み、削除、加筆、修正を様々な記号を駆使し解読した。ただし、ウィリンブランクが『『まごころ』の前テクストに関する考察』[60]でボナコルソ版で不十分及び間違っていると思われる部分に言及した。

また、1988年には、ピエール＝マルク・ド・ビアジの『フローベールのカルネ』[61]が出版された。ド・ビアジは30年間にわたるフローベールのカルネを作品別、時代別に分類し、非常に綿密な註をつけ、この書籍はフローベールの草稿研究には不可欠となっている。

7.1　精神分析的アプローチ

さて、このような生成批評版が相次いで出版される中で、『三つの物語』の草稿研究は非常に活発になっていった。ベルマン＝ノエルは、『ギュスターヴ・フローベールの4番目のコント』[62]でフロイトの手法を使用しながら、『まごころ』での父親不在のフェリシテと父親の代替物でもある鸚鵡との潜在的な性的関係を指摘した。また『聖

ジュリアン伝』では、ジュリアンの父親は女性的存在である一方で、母親は神の言葉を聞くというように男性的であり、最終的にキリストへと変貌しジュリアンとの性的関係が暗示されているレプラと母親は同一視できること、さらに『ヘロディアス』のサロメは、ヨカナンを要求するヘロディアスの性の象徴そのものであると解釈する。

また彼はサルトルが『家の馬鹿息子』で、ジュリアンが「親殺し」をするのは、フローベールの願望であるという考えに意義をとなえ、「ギュスターヴ、プルー、ジュリアンと私達」[63] の中で、それはサルトルの願望であり、フローベール＝ジュリアンという図式に同化するあまり、サルトルは客観的視点を失ったと草稿を分析しつつ主張し、ナルシスとオディプスの両面を持つこのコントは中世の伝説を超えた新しい可能性を示していると結論づけた。

また、彼のあとを継ぐように、ジェラルド・レーマンが『『聖ジュリアン伝』フローベールの想像的世界』[64] で、「英雄神話的側面」、通過儀礼を伴った「聖的側面」、主人公の「人物像からの側面」という三つの視点から、ユング的アプローチである「元型批評」を使い、このコントは英雄神話的側面を持っていながらも、ジュリアンは 2 度の通過儀礼を乗り越えることによって、太陽と月という父性・母性的要素を自らの内に統合し、無限の聖的空間に到達したと述べている。しかし、このような精神分析的批評は、『三つの物語』に関してもその後発展することなく、草稿研究は別の流れへと向かっていく。

7.2　物語論的アプローチ

ベルマン＝ノエルとほぼ同時期に、ドゥブレ＝ジュネットは 1975 年の「スリジーの討論会 Colloque de Cerisy」の発表をまとめた『フローベールにおける意味の生産』[65] に「『ヘロディアス』のルプレザンタシオン」を発表し、この論文の冒頭 で、« je voudrais répondre moins en narratologue qu'en généticienne »[66] と述べた上で、以前からの論争であった『ヘロディアス』は « histoire » か « poésie » かについての結論を導こうとする。そして、このコントは « histoire » として成立していると同時に、『聖書』の原型の魅力を保ち、それに新たな象徴性が付加されることで物語の意味が多様化し、現代にも通じる描写の « poésie » を含むものとなっていることを明らかにした。

以上のような状況から、フローベールに関する討論会も盛んになり 1976 年にはカナダのロンドンでコロックが開催される。そこでは彼女は「フローベールの小説技法」[67] を発表し、部分的に草稿を使用し、フェリシテとオーバン夫人の類似性、オウムと甥の関係、また登場人物の名前の由来及び「フェリシテの部屋」を分析した結果、草稿に見られた歴史や社会的な側面、あるいはフローベール自身の思い出が徐々に削除されたことに留意する。そして、『まごころ』は、穏やかな田舎の風景の中でのフェリシテの死という最終場面に集約されることを目的として書かれており、それこそがフローベールの小説技法であると指摘する。また、「『聖ジュリアン伝』－単純な形式と博識的な形式」[68] では、プランを使用しながら「語り」について分析し、『聖ジュリアン伝』は、中世の伝説のモデル「単純な形式　forme simple」に属していながらも、フローベール自身の文学理論、知識、及当時の心情が投入されることにより現代化され「博識的な形式　forme savante」となったと指摘する。だが、この時点ではいずれも彼女は物語論的アプローチのために、少量の草稿を利用しただけにすぎなかったと言えよう。

同様のアプローチは 1990 年代になってからも継続し、アルムト・レジロンが「フローベール『ヘロディアス』を再考する、視覚認識からテクスト動詞へ」[69] の中で、どのように思考が言葉へ、単語が文章へ、草稿が最終テクストへ転換したのかを分析している。彼女の論文の特徴は、まずフローベールの「グラフィックの習慣 habitudes graphiques」つまり紙の種類、使い方、余白や下線の意味を明確にしたことであろう。

また、1998 年には イザベル・ドネが「『三つの物語』小説の誘惑」[70] で、フローベールにとってのコントの意味を定義しようとした。アンドレ・ジョエルによると、コントとは周知の物語で、どんな続きもほのめかされないが、その特徴を『三つの物語』は満たしている。だが『ヘロディアス』の中で、フローベールが「広がり」や「発展」の

メタファーを集め「焦点化」を行なっていることから、この作品は小説の出発点とも見て取れると指摘する。そして、最終的には消去された草稿の詳細な描写は『三つの物語』がひとつの凝縮であることを示しており、それは同時にコントという形式を逸脱する可能性も秘めていることから、ドネは『三つの物語』はコントと小説の間を揺れ動く作品となっていると読み解いた。

他にもドミニック・ラバティエが 2002 年に「『まごころ』における語り」で、伝統的にコントの「語り手」は良識を伝える役割を果たしているが、フローベールは宗教、政治、イデオロギーをコントに持ち込まなかったとし、『まごころ』の魅力を次のようにまとめる。フェリシテは耳が聞こえなくなることからもわかるように、全体的に会話も少なく、描写も短い。だが、このような語り手の不在、はかなさや曖昧さがこのコントの詩的な映像を生み出していると言い、次のように結論付ける。« Ce conte qui commence avec l'image de la fermeture, finit avec celui de l'ouverture et du bonheur. Cela signifit la simplicité de Félicité, qui est < la bonté de son cœur> »[71].

さらに諏訪裕は『ナラトジーの理論と実践 - フローベール『まごころ』を読む』[72] で、ジュネットのナラトロジーの理論、「順序」「速度」「頻度」「叙述」「態」を駆使し、『まごころ』を詳細に分析している。

7.3　生成批評

さて、『三つの物語』の本格的な生成批評は 1980 年代に開始されたと言ってもよいだろう。上述のように、ドゥブレ＝ジュネットがおもに『まごころ』の分析を行なったのに対し、ド・ビアジは『聖ジュリアン伝』を中心とした本格的な生成批評を始める。彼は「『聖ジュリアン伝』における蓋然的な推敲」[73] の中で同作品を 3 つの要素から分析する。1 点目は、2 つの狩猟の場面での「語りの媒介者」の存在、2 点目は 2 章の冒頭のジュリアンの武勇伝と親殺し後の贖罪の旅の場面に見られる他の作家の作品からの「パロディ」的要素、3 点目はルーアン大聖堂のステンドグラスについてのコントの「書き終わり　excipit」に記された「メタサンボリック」な要素であり、このような特徴が複雑に錯綜し「伝説」と限定できないのが、『聖ジュリアン伝』の魅力だという結論を草稿分析から導きだした。

また、現在まで続いている論文集『ギュスターヴ・フローベール』の 1 巻目「フローベールとその後」が 1984 年に出版されたことからフローベール研究が、フランス文学全体においていかに注目され始めたかが伺い知れる。その中でドゥブレ＝ジュネットは「『まごころ』どのように終わったかー草稿研究」を執筆し、本格的な生成批評を始める。彼女は、« tout aléatoire qu'il être, un *incipit* n'en conserve pas moins son primordial (littérature et dans tous les sens) et decisive. Or on peurrait, à la limite, renverser ce paradoxe à propos de *l'excipit* »[74] と考え『まごころ』の最終場面の 12 の異なったフォリオを詳細に分析した。そして、最終的にタイトルでも使用されている「心　cœur」に注目し、この言葉は写実的であると同時に精神的意味合いを含み、それに呼応するように『まごころ』の「書き終わり」は物語内容を終わらせると同時に読者を多様な思考へと導く機能を持つと結論づけた。

事実、彼女は 1988 年に出版した論文集『物語のメタモルフォーズ』の「前書き」で次のように言う。

> Pour forcer un peu notre propos, disons que, si l'on a pensé jusqu'ici la génétique en termes d'évolution, le plus souvent même en termes de différence, lui accorder un fonctionnement plus autonome, lui accorder sa propre poétique.[75]

そして、『三つの物語』の草稿を解読していくと「外生的生成過程　exognèse」と「内生的生成過程　endogène」という特徴が見られると指摘する。「外生的生成過程」は「源泉　source」だけではなく、作品執筆時にフローベールが収集した様々な資料の草稿への挿入の過程となる。その後フローベールは、それらを省略あるいは置き換えつつ自分の思考の中へ取り入れ物語化するという「内生的生成過程」へて、固有のエクリチュールへと結晶させたと彼女は指摘したのである。

このような生成批評は、ジュリア・クリステ

ヴァによって提示された「間テクスト性」、ひとつのテクストが他のテクストと無関係に書かれることはありえない、いう理論へと連鎖していく。ドゥブレ＝ジュネットは前掲の『物語のメタモルフォーズ』で、次のように語る。

> La génétique complète doit s'appuyer sur une poétique de l'intertextualité (...) Le document doit susciter l'envie d'écrire, de réinsérer tel morceau de phrase, de faire fonctionner ce que nous appelons maintenant l'intertextualité.[76]

それではまず、『聖ジュリアン伝』の場合を見てみよう。ベンジャミン・F・バートは『フローベールの『聖ジュリアン伝』の源泉』[77]の中で、聖ジュリアン伝説の起源、中世の散文についてのフローベールの関心やラングロワの本とルーアン大聖堂のステンドグラスの解釈、アランソンのランコントル・デュポンの聖人伝等について、草稿を通して詳細に分析し、その結果フローベールは 聖人伝をパロディ化して楽しんだと読み解いている。

また、ド・ビアジは「オリエンタルのコントー『聖ジュリアン伝』における東洋の誘惑」[78]で、父親からサラセンの剣を与えられたジュリアンは、サラセンを討ち取ったことがきっかけで母親がサラセンの妻と結婚し、「親殺し」の時もサラセンの剣を使うということから、オリエントの叙事詩の強い影響を示唆する。それと同時にジュリアンが贖罪の旅に出る時にサンダルを脱ぐという行為はエンペドクレスが火山に身を投げた時のサンダルとも重なり合い、このコントは西洋とオリエントのテクストのユートピックな場となっていると指摘する。その後も彼は「聖人伝のパランプセスト、『聖ジュリアン伝』の創作過程における遊びの適応」[79]で、パロディックな側面を強調し、源泉のひとつであるルーアン大聖堂のステンドグラスの悪魔の存在に注目し、最初は草稿で悪魔が描かれていたにもかかわらず最終的には消去されたことから、フローベールは「だまし絵」として、「書き終わり」の「これは私の故郷の大聖堂のステンドグラスにほぼこのまま描かれている聖ジュリアンの物語である」を記したとする。さらに、「フローベール、終わりのないポエティック」[80]では、ド・ビアジは、フローベールは聖ジュリアン伝に聖ユベール、聖ウスタッシュ伝を付加し、それにオディプスとナルシスの神話を貼り付けることで物語に流動性をもたらし、狩猟や中世に関する様々な書物やシャトーブリアン、ユーゴーの作品を取り入れることで「終わりのない物語」の創作に成功したと論破する。

次に『まごころ』に関しては、フィリップ・ボヌフィスが「鸚鵡の展覧会」[81]で鸚鵡がドラクロワやクールベの 19 世紀の絵画にも登場することから、美術作品と『まごころ』の「間テクスト性」に言及した。その後小説ではあるがジュリアン・バーンズが『フローベールの鸚鵡』[82]を発表し、鸚鵡への興味をさらにかきたてたことも付記する必要があるだろう。

また、モリーン・ジェムソンは「ポンレヴェック－フローベールのパランプセスト ?」[83]でユーゴーの『瞑想詩集』の詩「明日、夜明けとともに Demain, dès l'aube」と『まごころ』を比較し、草稿が進むにつれ削除されてはいるが、ユーゴーの影響は確かに認められ、この作品は作者自身の人生と、すでに存在したテクストから成立しているパランプセストであると結論づけている。

近年では、ブリジット・ル・ジュゼが『鸚鵡と偽善者』[84]で、『まごころ』の中にはジョルジュ・サンドの『アンディアナ』やベルナルダン・ド・サン＝ピエールの『ポールとヴィルジニー』の影響が見て取れると同時にギリシャ神話の要素も取り入れられているとして、「間テクスト性」に言及している。また、特に中世から近代にかけての絵画の中に出現する鸚鵡の象徴性を論考し、動物であり聖なる存在、男性であり女性であるその「両性具有性 intersexualité」も指摘する。さらにフェリシテの会話が短くほとんど意味をなさないのは鸚鵡の「繰り返し」に共通するとし、それは繰り返しながら文章を削除するフローベールの創作態度とも一致することを明らかにした。

最後の『ヘロディアス』に関しては、ドゥブレ＝ジュネットは「フローベールのアポグラフィックな放蕩(『ヘロディアス』の饗宴の前テクスト)」[85]で、フローベールが饗宴の場面執筆に際して参照した

資料のどの部分をコピーしたかを調べ、彼がいかに過剰に情報を集め、それを注意深くそぎ落とし、ノートを選別したかを調査した。そして、草稿を何度も書き写し、修正するという創作法に注目し、このような繰り返しが想像力を膨らませる結果となり、「饗宴」の「語り」の部分はまさにこれらすべての要素の統合によって成立し、知的かつ絵画的なシンフォニーとなったことを説得的に示している。

その後、彼女は「『ヘロディアス』の厩－描写の生成」で以前の自分の『ヘロディアス』に関する生成批評は、草稿の分析が不十分であったと反省している。そこで、この論文の中では、マケルースの地下の洞窟の中に隠されていた馬が、どのようにしてコントの中に組み込まれたかを、プランとシナリオの換喩的要素、草稿の隠喩的・同義語的要素という視点から分析し、以下のように結論づけた。«l'ensemble des avants-textes, documentation comprise- est déjà, littérature »[86].

他には、ボナコルソが「科学とフィクション -『ヘロディアス』のノートの処理」[87]で「カルネ16」は「カルネ16bis」に先行すると考え、フローベールは文書のみならずコイン等も参照したが、現実性をだすためにあえて史実を変更したと論じた。また、フランソワーズ・ラスティエは「生成の過程と源泉の適合－『ヘロディアス』の例」[88]で、直ちに「間テクスト」と見分けられるものと「暗示」によって隠されているものがあると述べた。彼女はまず、『聖書』は最初「外的間テクスト性 intertextualité externe」だったが、物語内の「鉱物」や「水」の象徴的意味を分析していくと「内的間テクスト性 intertextualité interne」に変化していると指摘する。また、「城塞」描写はムルショワール・ド・ヴォゲの『エルサレムの寺院』[89]から来ており、「寺院」に関してはフラウィウス・ヨセフスの『ユダヤ戦記』[90]の影響が見られると判断する。しかし、それらの様々な間テクストは、コピー、引用、模倣、書き直しと草稿が進むにつれ、隠蔽され曖昧となるが、それこそが『ヘロディアス』の多義的な読みを可能にしていると論じている。

また、ジゼル・セジャンゼールは「『ヘロディアス』における政治のエクリチュール」[91]で、フローベールが「カルネ15」では聖ヨハネに興味を持っていたが、「カルネ16 bis」になると「国家」に注目し、「カルネ16」ではフラウィウス・ヨセフスの著述等を参考に政治的な言説を重視した事実から、宗教を逸脱した新たな近代的とも言える逸話を創作したと論考している。さらに、セシル・マテは、「フローベールの『ヘロディアス』の石の肥沃性」[92]で、すべての人物や風景を出現させている「不可視の支配者」の存在を明らかにする。そしてヨカナンの預言が、神の怒りがすべての町を破壊する、すなわちすべてが「石化される pétrifié」ことを意味することから、このコントは古代の神々の死からキリスト教の誕生という宗教の移行を物語っていると指摘する。また、2008年には彼女は『歓待のエクリチュール－フローベール『三つの物語』の信仰の空間』[93]で、草稿を通して、伝説、『聖書』、古代からの著述はもちろん、ユーゴー、ミシュレ、ルナンのテクストとの「間テクスト性」に注目しながら、聖クリストフの伝説の重要性に言及しつつ各コントの信仰と様々な「歓待」との関係を明晰に読み解いた。

他には、当時文学や絵画のモチーフとしてヨーロッパ中で流行していたサロメを注視し、工藤庸子は『サロメ誕生－フローベール・ワイルド』[94]で、「脱宗教化」の道を歩んでいた19世紀のヨーロッパにおけるオリエントの意義を問い直した。さらに大鐘敦子は2006年に『サロメのダンスの起源』[95]で、ルナンの『イエス伝』のみならず古代の太陽と月の神話、エジプトやギリシャの美術品、19世紀に至るまでの絵画の影響を通じて、ヘロドの饗宴がユダヤ教や異教の供犠的な側面を有していることを解明する。そしてその「場」での宿命の女ヘロディアス＝サロメのダンスが、エリヤの「蘇り」と「再生」を象徴し、そこからサロメとヨカナンの密接な結びつきが見えると新たな論を展開した。

同時に近年、様々な視点からの研究も開始されている。2005年にマチュー・デポルトが「誰が狩猟に行くのか？フローベールの『聖ジュリアン伝』」[96]で、ジュリアンの家族と鹿の家族は二重化していることから、ジュリアンは二度親を

殺すことで初めて聖人に達したのであり、それが本来の伝説にはない二度目の狩猟を付加したフローベールのジュリアン伝の特徴であると述べている。またエリック・ル・カルヴェーズは « microgénétique » という方法で文体論という観点から、フェリシテとテオドールの恋物語の場面のシナリオからコピイストの原稿まで 8 つのフォリオを「フェリシテの恋愛」[97] の中で読み解き、最初に描写が決定され、次第に換喩を含んだ語りの技法が確立され、最終的には二つが調和していく過程を詳細に追っている。

他には 2009 年に小説における「現実」を新たに問い直す『フローベールと現実』という論文集が発行された。カーリン・ヴェスターヴェレは「鏡」の作用に注目し「聖ジュリアンとナルシスの神話ーギュスターヴ・フローベールにおけるクリスチャンニスムのイメージ」で、ジュリアンが水に映った自分を見て、自らが殺害した父親を認め自殺を留まったことから、オディプスだけではなく自己が解体される神話であるナルシスを認めている。またコルネリア・ヴィルトは「フローベールの聖ジュリアンーヨーロッパ文学とラテン系中世との対峙」でジュリアンの歓待の精神は、ユリシーズのみならずあらゆるヨーロッパ文学を包括しているという意味でレアリスムを見出せるとする。さらに、バルバラ・ヴィンケは「フェリシテの放棄ーフローベールの『まごころ』」で、社会的下層に属しているフェリシテや鸚鵡が神秘性を有し信仰の対象となると同時にエロティックなフェティシスムの対象となる混合的状態こそがこのコントを現実的なものとし、同時に無限の広がりを与えていると解釈している [98]。

８．結論

現代では、研究の様相がコンピューターの飛躍的な普及によって大きく変化した。印刷された雑誌は、入手が困難であったり、入手までに時間がかかるという難点を抱えていたが、現在ではネット上で公開される場合も多く、我々は無料で瞬時に論文・資料や情報を閲覧することができるようになった。また、Gallica 上でも、様々な作家の著書や草稿が公開され、容易に文献に接することが可能となり、このような状況は確実に研究のさらなる広がりをもたらしている。実際、フローベールの作品研究の流れを追っていくと、テクストの内部のみを純粋に読解するのではなく、広域な意味での「間テクスト性」という共時性的要素が批評分析に導入されるとともに、実証主義的講壇批評とは異なった視点から、テクストの外部、すなわち歴史の通時性や知の様相、さらにはテクストが誕生した社会状況の影響下にあった作者の存在を再び考慮し、多義的なテクストの読みを試みようとする傾向が見出される。それは 2009 年に、生成研究の第一人者であるド・ビアジがフローベール作品に頻繁に登場する馬の象徴性に留意しながら作家の人生と作品の誕生をクロスさせる形式で著述した『フローベールー特別な生き方』[99] を刊行したことにも垣間見れるであろう。

註

1. (1) 蓮見重彦・小倉考誠、「フローベール研究の現状〈1965 － 1988〉」、『文学』12 月号、岩波書店、1988 年、(2) 山川篤『フローベール研究　―作品批評史〈1850 － 1870〉』、風間書房、1970 年、(3)『フローベール全集、別巻、フローベール研究』、筑摩書房、1968 年参照。
2. *Œuvres complètes de Gustave Flaubert*. 13 vol., 1910-1930 et *Correspondance*, 13 vol, Paris : Conard, 1926-1954.
3. *Œuvres de Gustave Flaubert*, 18 vol, Lausanne : Rencontre, 1964-1965.
4. *Œuvres complètes de Gustave Flaubert*, 16 vol, Paris : Club de l'Honnête Homme, 1971-1975.
5. Gustave Flaubert, *Œuvres*, 2 tomes, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1936.
6. Gustave Flaubert , *Œuvres de Jeunesse*, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2001.
7. Gustave Flaubert, *Correspondance*, 5 tomes, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1973-2007.
8. 『フローベール研究－作品批評史〈1850 － 1870〉』op. cit. 参照。裁判については Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, Paris : Gallimard, coll.

« Folio », 1998, pp. 483-583 参照。

9. Duranty, *Réalisme*, 15 mars 1857, p. 79 (Centre Flaubert, Université de Rouen, http://flaubert.univ-rouen.fr).
10. Gustave Flaubert, *Corresopndance II (juillet 1851-décembre 1858)*. Édition établie, présentée et annotée par Jean Bruneau, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1980, p. 644. 1852 年 10 月 30 日，ロジェ・デ・ジュネット夫人宛。
11. *Ibid*., p. 667. 1857 年 1 月 16 日、アシル宛。
12. Gustave Flaubert, *Salammbô*. Préface d'Henri Thomas, introduction et notes par Pierre Moreau, Paris : Gallimard, coll. « Folio », 1970, pp. 483-497.
13. *Gustave Flaubert - les Goncourt, Correspondance*. Texte établi, préface et annoté par Pierre-Jean Dufief, Flammarion, 1998, p. 214.
14. Gustave Flaubert, *Correspondance V (janvier 1876 - mai 1880)*. Édition présentée, établie, et annotée par Jean Bruneau et Yvan Leclerc, avec la collaboration de Jean-François Delesalle, Jean-Benoît Guinot et Joëlle Robert, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade » , 2007, pp. 794. 1874 年 5 月 1 日、ジョルジュ・サンド宛。
15. Bruna Donatelli, « Flaubert et Taine : moments d'un dialogue », *Revue Flaubert*, n° 7, 2007 (Centre Flaubert, Université de Rouen, http://flaubert.univ-rouen.fr).
16. Émile Zola, « Causerie », *La Tribune*, 28 novembre 1869 (Centre Flaubert, Université de Rouen, http://flaubert.univ-rouen.fr).
17. Jules de Gautier, *Le Bovarysme. La psychologie dans l'œuvre de Flaubert : suivi d'une série d'études réunies et coordonnées*, Editions du cerf, 1892.
18. Marcel Proust, « A propos du <style> de Flaubert », in *Flaubert savait-il écrire? Une querelle grammaticales (1919-1921)*, Textes réunis et présents par Gilles Philippe, ELLUG Université Stendhal Grenoble, 2004, pp. 81-97
19. Charles De Bos, « Sur le milieu intérieur chez Flaubert » in *Flaubert*. Texts recueillis et présents par R. Debray-Genette, Paris : FDD, coll. « Miroire de la critique », 1970, p. 57.
20. Erich Auerbach, *Mimésis*. Traduction française par Cornelius Heim, Paris : Gallimard, 1968. この批評はドイツで 1946 年に出版された。
21. Georges Poulet, « Flaubert » in *Études sur le temps humain*, Paris : Plon, 1949.
22. Georges Poulet, « La pensée circulaire de Flaubert » in *Métamorphoses de cercle, Paris* : Plon, 1961.
23. Voir Jean-Pierre Richard, « La création de la forme chez Flaubert » in *Littérature et sensation*, Paris : Seuil, 1954.
24. Jean Rousset, « *Madame Bovary* ou le Livre sur rien » in *Forme et signification*, Paris : J. Corti Rennes, 1962.
25. Pierre Danger, *Sensation et objets dans le roman de Flaubert*, Paris : Armand Colin, 1973.
26. Jean-Paul Sartre, *L'idiot de la famille : Gustave Flaubert de 1821 à 1857*, 3 tomes, Paris : Gallimard, 1971-1972.
27. Roland Barthes, *Le degré zéro de l'écriture, suivi de Nouveau éssais critiques*, Paris : Seuil, coll. « Points », 1953.
28. *Ibid*., p. 136.
29. Gérard Genette, *Figures I*, Paris : Seuil, coll. « Points », 1966, p. 243.
30. Georg Lukács, *Théorie du Roman,* Paris : Gallimard, 1916.
31. Pierre Macherey, « L'Irréalisme de Flaubert » in *A quoi pense la littérature? Exercices de la philosophie littéraire*, Paris : PUF, coll. « Pratiques théoriques », 1990.
32. Pierre Bourdieu, *Les Règles de l'art. Genèse et structure du champ littéraire*, Paris : Seuil, 1992.
33. Marthe Robert, *Roman des origines et origines du romans*, Paris : Gallimard, 1972.
34. Jean Bellemin-Noël, *Le Texte et l'avant-texte*, Paris : P.U.F, 1972.
35. Jean Bellemin-Noël, *Psychanalyse et littérature*, Paris : P.U.F. , 1978.
36. Flaubert, *Plans et scénarios de Madame Bovary*. Transcription du manuscrit et présentation par Yvan Leclerc, CNRS Éditions / Zulma, coll. « Manuscrits », 1995.

37. Kazuhiro Matsuzawa, *Introduction à l'étude critique et génétique des manuscrits de L' Éducation sentimentale de Gustave Flaubert − l' amour, l' argent, la parole−* , Tokyo : France Tosho, 1992.
38. Eric Le Calvez, *La production du descriptif : exogenèse et endogenèse de L'Éducation sentimentale*, Amsterdam ; New York : Rodopi, 2002. 他にも同作者の、*Flaubert topographe : l'Éducation sentimentale, éssai de poétique génétique*, Amsterdam ; New York : Rodopi, 1997 がある。
39. Bernard Gagnebin, *Flaubert et Salammbô : genèse d'un texte*, Paris : PUF, 1992.
40. Gisèle Séginger, *Naissance et métamorphoses d'un écrivain : Flaubert et Les Tentations de Saint Antoine*, Paris : Honoré Champion éditeur, 1997.
41. Sugaya Norioki, *Flaubert épistémologue. Autour du dossier médical de Bouvard et Pécuchet*, Amsterdam ; New York, Rodopi, 2010.
42. Voir Alfred Darcel, *Journal de Rouen*, 2 mai 1877 (Centre Flaubert de l'Université de Rouen, http://flaubert.univ-rouen.fr).
43. Théodore de Banville, *Le National*, 14 mai 1877, (Centre Flaubert de l'Université de Rouen, http://flaubert. univ-rouen. fr).
44. Ferdinand Brunetière, *Revue des Deux Mondes*, 15 juin 1877 (Centre Flaubert de l'Université de Rouen, http://flaubert. univ-rouen. fr).
45. Claude Digeon, *Le dernier visage de Flaubert*, Paris : Éditions Montaigne, 1946.
46. Roland Barthes, « Introduction à l'analyse structurale des récits » in *Œuvres complètes. Tome II, 1966-1973*. Édition établie et présentée par Eric Marty, Paris : Seuil, 1994, p. 82. この論文は 1966 年に *Communications* に発表された。
47. Roland Barthes, *Le bruissement de la langue : Éssais critiques IV*, Paris : Seuil, 1984. この論文は 1968 年に *Communications* に発表された。
48. Raymonde Debray-Genette, « Les figures du récit dans *Un cœur simple* » in *Poétique* , n° 3, 1970, pp. 348-364. 引用は *Métamorphoses du récit*, Paris : Seuil, 1988, p. 288.
49. Raymonde Debray-Genette, « Du mode narratif dans les *Trois contes* » in *Travail de Flaubert*. Sous la direction de Gérard Genette et Tzvetan Todorov, Paris : Seuil, 1983, p.163.
50. Marie-Julie Hanoulle, « Quelques manifestations du discours dans *Trois contes* », *Poétique*, n° 9, 1972, pp. 41-49.
51. Shigehiko Hasumi, « Modalité corrélative de narration et de thématique dans les *Trois contes* de Flaubert », *Études de langue et littérature françaises, Univ. de Tokyo , vol. XXI*, n° 4, 1973, pp. 35-79.
52. Shoshana Felman, « Illusion réaliste et répétition romanesque », in *Change : special issue entitled La Critique générative*, n° 16-17, 1973.
53. Shoshana Felman, « La signature de Flaubert : *La Légende de Saint Julien l'Hospitalier* », *Ruvue des sciences humaines*, n° 181, 1981-1, pp. 39-57.
54. Marie-Jeanne Durry, *Flaubert et ses projets inédits*, Paris : Librairie Nizet, 1950.
55. François Fleury. *Gustave Flaubert. Plan, notes et scenarios de « Un cœur simple »*, Rouen : Lecerf, 1975.
56. George A. Willenbrink, *The dossier of Flaubert's « Un cœur simple »*, Amsterdam ; New york : Rodopi, 1976.
57. Giovanni Bonaccorso et collaborateurs, *Corpus Flaubertianum. I, Un cœur simple : en appendice Edition diplomatique et génétique des manuscrits*, Paris : Société d'édition Les Belles lettres, 1983.
58. Giovanni Bonaccorso et collaborateurs, *Corpus Flaubertianum. II : Hérodias. Edition diplomatique et génétique des manuscrits. tome 1,* Paris : Librairie Nizet, 1991.
Giovanni Bonaccorso et collaborateurs, *Corpus Flaubertianum. II : Hérodias. Edition diplomatique et génétique des manuscrits. tome 2,* Paris : Sicania, 1995.
59. Giovanni Bonaccorso et collaborateurs, *Corpus Flaubertianum. III, La Légende de Saint Julien l'Hospitalier. Édition diplomatique et génétique des manuscrits*, Paris : Didier Érudition, 1998.
60. George A. Willenbrink, *Un cœur simple : remarques sur l'avant-texte*, Amsterdam ; New york : Rodopi,

1989.
61. Pierre-Marc De Biasi, *Carnets de travail*, Paris : Balland, 1988.
62. Jean Bellemin-Noël, *Le quatrième conte de Gustave Flaubert*, Paris : PUF, 1990.
63. Jean Bellemin-Noël, « Gustave, Poulou, Julien et nous autres » in *Gustave Flaubert 4 : Intersections*. Textes réunis par Raymond Debray-Genette, Claude Duchet et Bernard Masson, Paris : Lettres Modernes Minard, 1994.
64. Gérard Lehmann, *La Légende de Saint Julien l'Hospitalier. Essai sur l'imaginaire flaubertien*, Odense Unversity Press, 1999.
65. *La Production du sens chez Flaubert*. Direction Claudine Gothot-Mersch [Colloque de Cerisy-la-Salle du 21 au 28 juin 1974], Paris : 10/18, Union générale des éditions, 1975.
66. Raymonde Debray-Genette, « Re-présentation d'*Hérodias* » in *Métamorphoses du récit*, op. cit., p. 189.
67. Raymonde Debray-Genette, « La technique romanesque de Flaubert dans *Un cœur simple*: étude de genèse » *in Langages de Flaubert*, Actes du Colloque de London (Canada), Paris, Minard, 1976.
68. Raymonde Debray-Genette, « *La Légende de Saint Julien L'Hospitalier* : forme simple, forme savante » in *Essais sur Flaubert*, Paris : Nizet, 1979.
69. Almuth Résillon, « Flaubert : Ruminer *Hérodias* : du cognitif-visuel au verbal-textuel » in *L'Écriture et ses doubles : genèse et variation textuelle*, Paris : Éditions du CNRS, 1991.
70. Isabelle Daunais, « *Trois contes* ou la tentation du roman », *Poétique*, n° 114, pp. 171-183, 1998.
71. Dominique Rabatié, « Conteur dans *Un cœur simple* », *Littérature*, n° 127, septembre, 2002, p. 93.
72. 諏訪裕、『ナラトジーの理論と実践 - フローベール『まごころ』を読む』、近代文芸社、2007 年。
73. Pierre-Marc de Biasi, « L'élaboration du problématique dans *La Légende de saint Julien l'Hospitalier* » in *Flaubert à l'œuvre*, Paris : Flammarion, 1980.
74. Raymonde Debray-Genette, « *Un cœur simple* ou comment faire une fin, étude des manuscrits » in *Gustave Flaubert 1 : Flaubert, et après*, Paris : Minard, 1984, pp. 105-106.
75. *Métamorphoses du récit*, op. cit., p. 19.
76. *Ibid*., p. 27.
77. Benjamin F. Bart et Robert Francis Cook, *The Legendary Sources of Flaubert's Saint Julien*, Toronto : University of Toronto Press, 1977.
78. Pierre-Marc de Biasi, « Un conte à l'orientale : la tentation de l'Orient dans *La Légende de Saint Julien l'Hospitalier* » , *Romantisme* , n° 34, pp. 47-66.
79. Pierre-Marc de Biasi, « Le palimpseste hagiographique, l'appropriation ludique des sources édifiantes dans la rédaction de *La Légende de Saint Julien »* in *Gustave Flaubert 2. Mythes et religions 1*, Paris : Lettres Modernes Minard, 1986, pp. 69-123.
80. Pierre-Marc de Biasi, « Flaubert et la poétique du Non-Finto » in *Le Manuscrit inachevé*, Paris : CNRS, 1986, pp.45-73.
81. Philippe Bonnefis, « Exposition d'un perroquet », *Revue des sciences humaines*, n° 181, Lille : Presses Université de Lille, 1981, pp.75-110.
82. Julian Patrick Barnes, *Flaubert's Parrot*, London : Jonathan Cape, 1984.
83. Maureen Jameson, « Le villequier à Pont-Lévêque : un palimpseste Flaubertien? » in *Gustave Flaubert 4*, op. cit., pp. 169-185.
84. Brigitte Le Juez, *Le papegai et le papelard*, Amsterdam; New york : Rodopi, 1999.
85. Raymonde Debray-Genette, « Les débauches apographiques de Flaubert (l'avant-texte documentaire du festin d'*Hérodias*) » in *Romans d'archive,* Lille : Presses Universitaires de Lille, pp. 39-77, 1987.
86. Raymonde Debray-Genette, « Les écuries d'*Hérodias* : genèse d'une description », *Genesis, manuscrits, recherche, invention*, n° 1, p. 111.
87. Giovanni Bonaccorso, « Science et fiction : le traitement des notes d'*Hérodias* » in *Flaubert, l'autre*, Lille : Presses Universitaires de Lille, 1989.
88. Françoise Rastier, « Parcours génétiques et appropriation des sources L'exemple d'*hérodias* » in *Text(s) et Intertext(s)*. Etudes réunies par Eric Le Calvez et Marie-Claude Canova Green, Amsterdam ;

Atlanta : Rodopi, 1997

89. Melchior de Vogüé, *Le Temple de Jérusalem*, Paris : Noblet et Baudry libraires-éditeurs, 1864.
90. Flavius Josèphe, *Guerre des Juifs*, Paris : Minard, 1965.
91. Gisèle Séginger, « L'écriture du politique dans *Hérodias* » , *Revue Flaubert [en ligne] , 5, Flaubert et la politique*, numéro dirigé par Dolf Oelher (Centre Flaubert de l'Université de Rouen, http://flaubert.univ-rouen.fr).
92. Cécile Matthey, « Fertilité de la pierre dans *Hérodias* de Flaubert », *Romantisme*, n° 127, pp. 79-88, 2005.
93. Cécile Matthey, *L'écrture hospitalière : l'éspace de la croyance dans les Trois Contes de Flaubert*, Amsterdam ; New york : Rodopi, 2008.
94. 工藤庸子、『サロメ誕生 ― フローベール・ワイルド』、新書館、2001 年 。
95. Atsuko Ogane, *La genèse de la danse de Salomé. L' « appareil scientifique » et la symbolique polyvalente dans Hérodias de Flaubert*, Tokyo : Presses Universitaires Keio, 2006. 同著者の『サロメのダンスの起源 フローベール・モロー・マラルメ・ワイルド』、慶応義塾大学出版会、2008 年も参照。
96. Matthieu Desportes, « Qui va à la chasse ? Sur *Le Saint Julien l'Hospitalier* de Flaubert », *Romantisme*, n° 129, pp. 31-40.
97. Eric Le Calvez, « Le baiser de Félicité » in *Genèses flaubertiennes*, Amsterdam ; New York : Rodopi, 2009, pp.19-36.
98. Karin Westerwelle, « Saint Julien et le mythe de Narcisse — Les images du christianisme chez Gustave Flaubert », Cornelia Wild, « *Saint Julien l'Hospitalier* de Flaubert : un face à face entre la littérature européenne et le Moyen Âge latin », Barbara Vinken, « L'abandon de Félicité — *Un cœur simple* de Flaubert » in *Le Flaubert réel*, édité par Barbara Vinken et Peter Fröhlicher, Tübingen : Max Niemeyer Verlag, 2009.
99. Pierre-Marc de Biasi, *Gustave Flaubert. Une manière spéciale de vivre*, Paris : Grasset, 2009.